

夏休み

登場人物

大場憲一（現代・昭和十一年）

高田一郎

遠野みどり

大岩洋子

天野満夫

青柳こだま

宮澤治子先生

山父

傘化け 1～5

カシヤボ 1～4

戦時中の子どもたち

少女

現代の夏休みのある日　七つ森の入り口

舞台は七つ森の入り口。

響き渡る蝉時雨。

降り注ぐ夏の日差しを浴びて、一人の老人が舞台中央で後ろ向きに立っている。

老人の名前は大場憲一。

大場(現代)　(後ろ向きで)もういいかい。

声　　まあだだよ。

大場(現代)　もういいかい。

声　　まあだだよ。

大場(現代)　もういいかい。

声　　もういいよ。

その声に大場が振り返る。

彼は手に真っ赤なかざぐるまを持っている。

大場(現代)　そうだ、ここだ、ここだった。思い出したぞ。そう、あれは昭和十一年、私たちは七つ森小学校の六年生だった。あの日私たちはみんなでかくれんぼをしてたんだ。あの時一緒だったのは…

一人の少年が現れる。

その少年はかくれんぼの鬼になって、数を数える。

少年　七．八．九．十　よーし、見つけにいくぞ。

そう言って走り出そうとする。その走り出しの姿勢で少年は静止する。

大場(現代)　高田一郎。いつも私たちのまとめ役だった。みんなからはターちゃんって呼ばれていた。

高田、隠れている友だちを捜しに行く。

高田　み一つけた。

一人の少女が可愛らしく出てきて、静止する。

大場（現代） 遠野みどり。みんなからは、みーちゃんと呼ばれていた。かわいらしくて、みんなから好かれていた。とても歌のうまい子だった。

かくれんぼが続く。

高田 みっけ。

少女 くそっ、みかったか。

一人の女の子が、のっしのっしと出てくる。そして静止する。

大場（現代） 大岩洋子。みーちゃんとは正反対で気が強くてまるで男のようだった。大岩って名前からオイワって呼ばれていた。

かくれんぼが続く。

一人の少年が今見つかった子どもたちの中に入り知らん顔をしている。

しばらくして高田がその少年に気づく。

高田 みっけ。

その少年が「見つかったか」というポーズをして静止する。

大場（現代） 天野満夫。いつも人のやることと反対の事ばかりやっているんで、みんなから天邪鬼って呼ばれていた。私をいじめるのはいつもあいつだった。

高田 さ、みんな見つかったぞ。おい、バケおまえ次は一緒にやろうぜ。

昭和十一年の大場憲一が登場する。

みんなが大場を囲んだ形で静止する。

大場（現代） そしてこの私、大場憲一。名前を短くするとオバケ。更に短くしてみんなからはバケって呼ばれていた。でも、そのあだ名は、そんなに嫌いじゃなかった。私はお化けのことが大好きだったから。

現代の大場が去る。

高田 な、やろうぜ。な。

この瞬間、舞台は昭和十一年となる。

昭和十一年七月二十三日

七つ森の入り口

大場 嫌だよ、だって夕方かくれんぼをすると隠し神にさらわれてしまうんだよ。

天野 (笑って)隠し神だってよ。そんなのいるわけないだろ。

大場 隠し神を信じないと今に大変なことになるよ。

天野 (笑って)馬鹿とはつき合いきれないね。

大場 なんだとー。

遠野 あっ(祈る)

高田 何してんだい。

遠野 流れ星に願いをかけたの。流れ星が落ちた後に願いをかけると、その願いがかなうって言われているのよ。

天野 迷信だよ、そんなの。今の世の中に…そんな…古くさい。

大岩 天邪鬼は夢がないわね。あたしは信じる。早く落ちないかな。落ちろ。こら落ちろ。(ドスン、ドスンと地響きを立てる) あっ、落ちた。

大岩が祈る。遠野、大場、高田も祈り始める。

天野は祈らず、大場の横で、聞き耳を立てている。

天野 (突然) ははははは、ははははは。聞いてくれよ、バケの奴、お化けに会いたいだってさ。馬鹿じゃねーか。この科学の時代にお化けなんてよ。おめー六年生のくせに考えてることは、一年生と同じか、それ以下じゃねーの。

大場 なんだとー。

高田 まあまあ。どんな願い事をかけようとその人の勝手だろ。喧嘩はそこまで、もう一度かくれんぼしよう。今度はみーちゃんが鬼だよ。バケもやれよ。

大場 でも隠し神が…

高田 大丈夫だよ。じゃあ始めるぞ。

遠野 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十。

かくれんぼが始まる。

全員見つかる。

今まで五人だった子どもたちが六人になっている。

高田 あれー。一、二、三、四、五、六…一、二、三、四、五、六…俺たち六人だったかな。五人じゃなかったっけ。

遠野 そういえばそうね。でもその一人は誰。

大岩 でもみんな最初っからいたよ。

大場 座敷童子だ。

みんな 座敷童子？

遠野 座敷童子って何。

大場 妖怪だよ。

天野 また始まった。

大岩 でもおもしろそうな話じゃない。どんな妖怪なの。

大場 例えば五人で遊んでるとするだろ、ふと気がつくと人数が一人増えて六人になっているんだ。みんな知っている顔なのにどう数えても六人いるんだ。誰が後からやってきたんだか考えてみても、みんな最初からいたものばかりなんだ。でも最初は確かに五人だったんだ。その増えた一人が座敷童子さ。

高田 この中に一人座敷童子がいる。誰だ！

天野 ターちゃんまで変なこと言うなよ。

高田 さてはおまえが。

天野 馬鹿なこと言うなよ。科学に強い天野満夫を忘れたのかよ。

高田 冗談だよ。

大場 僕だって初めからいたさ。

天野 覚えてないな。

大場 さっきけんかしたばかりだろ。

遠野 私もはじめからいたわ。さっき流れ星に願いをかけたばかりだもの。

高田 そうだよな。じゃあ君だ（と言って一人の少女を指差す。その少女が増えた一人であるが、誰もそれに気づいていない。この後、彼女は青柳こだまと呼ばれることになる。）

青柳 馬鹿言わないでよ。私だって流れ星に願いをかけたし、みんなと一緒ににかくれんぼもしたじゃない。

高田 そうだよな。それじゃあ…（みんな大岩を疑いの目で見ると）

大岩 何よー。それじゃあたしが妖怪だって言うの。

高田 もうよそう、どうやら俺の思い違いだったようだな。

天野 そうそう、この世の中に妖怪なんているわけがないもんな。

大場 そうかなー。

大岩 バケ、まだあたしを妖怪にしたいの（大場に迫る）。

大場 そ、そういうわけじゃないけど。

遠野 （大岩をなだめるように）ね、お星様がとっても綺麗よ。まるで星の
野原にいるみたい。あっ、流れ星。（そう言って、何かを祈り始める）
青柳 あっ。（そう言って、空の別の場所を指差し、何かを祈り始める）
大岩 おー。（そう言って、空の別の場所を指差し、何かを祈り始める）
大場 わー。（そう言って、空の別の場所を指差し、何かを祈り始める）
高田 流れ星の雨だ。（そう言って、何かを祈り始める）

天野は祈っている友だちをあきれた顔で見ている。
しかし、最後にはみんなから離れた場所で何かを祈る。
暗転

昭和十一年七月二十四日 教室

明かりがつくとそこは昭和十一年の教室である。
中央で子どもたちが楽しそうに話している。
宮澤先生が教室に入ってくる。
子どもたちは慌てて席に着く。

高田 起立。気をつけ。先生おはようございます。
みんな おはようございます。
宮澤先生 おはようございます。あら、机の並び方おかしくない。確か一番後ろの席は隣がいなくて、天野君が一人で座ってなかった。

青柳がびっくりして立ち上がる。

青柳 やだ先生、おかしいと言わないでください。前からこのままです。
宮澤先生 そうよね、暑さでぼけちゃったかな。さて、明日から待ちに待った夏休み。みんな休み中の計画はしっかり立てた。

全員 はい。

宮澤先生 高田君。あなたはどんな計画を立てたの。

高田 俺は、毎日ベルリン・オリンピックをラジオで聴こうと思ってます。なんせ、初めての生中継ですから。

宮澤先生 でも不思議ねー。ドイツで行われていることが、同じ時間に日本にいて聴けるなんて。

天野 先生。ラジオの生中継くらいで驚いてちゃ時代に遅れますよ。今度のベルリン・オリンピックでは世界初のテレビジョンが使われるんですよ。

宮澤先生 テレビジョン？なにそれ。

天野 うーん、ちょっと説明するの難しいなー。あの映画知ってますよね。
要するに、ベルリン大会の様子が同時に映画の画面を小さくした、この
くらいの画面に写るんですよ。

大岩 ほんとー。信じられない。

高田 でも、そいつはすげーな。

天野 まだまだ驚くのは早いよ。次の昭和十五年のオリンピックがもし東京
になれば、この日本でも、オリンピックをテレビジョンで放送する
予定なんだぞ。そして将来は、自分のうちでテレビジョンが見られるよ
うになるかもしれないんだぞ。

宮澤先生 さすが天野君、よく知ってるわね。

高田 先生。天邪鬼は、科学者になるのが夢なんです。

宮澤先生 天野君ならなれるかもね。

天野は照れる。

高田 先生、ベルリン大会では、日本はどれくらい金メダルが取れると思
いますか。

宮澤先生 …高田くんはどう思うの。

高田 きっと水泳はたくさん取りますよ。前回のロサンゼルス大会で二位
だった前畑は優勝する可能性大かな。三段跳びも、オリンピック三連
破は堅いな。高跳びも期待できますよ。

宮澤先生 詳しいのね。

高田 俺は、オリンピックに出るのが夢なんです。

宮澤先生 へー、高田君、運動得意だからね。次のオリンピックに出られ
るといいわね。

高田 次のオリンピックは、東京かヘルシンキですからね。東京になれば
いいな。でも四年後はまだ中学四年生だから出るのは難しいな。

宮澤先生 何か先生もオリンピックに興味がわいてきちゃった。放送は何
時なの。

高田 朝の六時半から七時と夜の十一時から十二時までです。

宮澤先生 両方聴く気なの。

高田 はい。

宮澤先生 朝はともかく、夜は寝なさい。まだ子どもなんだから。

天野 先生、僕はそうします。

宮澤先生 高田君もそうしなさい。

高田 (ふてくされた感じで)はい。

大岩 先生！先生！先生！あたし、映画を見にいきます。

宮澤先生 何見るの。

大岩 『虚栄の市』です。先生、この映画、総天然色なんですよ。

宮澤先生 総天然色？

大岩 白と黒の画面じゃなくって、今あたしが見ているのと同じ色で写っているんですって。

遠野ほんと、凄いのね。

宮澤先生 大岩さん、あなた映画の話になるとほんと生き生きしてくるわね。

大岩 先生！あたし、女優志望なんです。

天野 ははー、無理無理。

大岩 何よー。

天野 おめえじゃ無理ってーの。銀幕のスターってのはな、立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花って感じの綺麗な女の子しかねないの。おめえは立てば大根、座ればスイカ、歩く姿は豚の鼻だろ。（みんな笑う）

大岩 てめー、よくも言ってくれたな。

天野に襲いかかる。

宮澤先生 大岩さん、やめなさい。あなた女の子でしょ。

大岩 だって。（泣き出す）

宮澤先生 天野君、あなたは口が悪すぎます。大岩さん、あなたもそのくらいのことで泣くんじゃないの。

大岩 （突然立ち上がって）先生、今の演技でした。うまかった？

宮澤先生 大岩さん！大人をからかうんじゃないの。

大岩 ごめんなさい。

宮澤先生 遠野さん。あなたは何か計画があるの。

遠野 歌を習いにいこうと思っています。

宮澤先生 そう。あなたとっても歌がお上手なものね。

大岩 先生、みーちゃんの夢は歌手なんです。

宮澤先生 へー。渡辺はま子のような歌手に？

遠野 いいえ、クラシックです。オペラ歌手になりたいんです。

高田 オペラ？何だそれ。

大岩 （堂々とした発声で）「アーアーアー」って歌うやつでしょ。

遠野 （うなずく）

宮澤先生 みんなずいぶん大きな夢をもっているのね。夢をもつってとっても素敵なことね。青柳さん、さっきからずーと黙っているけどあなたは夏休みをどのように使うの。

青柳 私、まだ決めていません。すみません。

宮澤先生 何も、謝ることなんかないのよ。先生だって何するか決めてないんだから。人それぞれでいいの。さてとみんなの予定も聞き終ったしと…

高田 先生、まだバケが残っています。

宮澤先生 ごめんなさい。ついつい忘れてしまって。

大場 いいんです…どうせ…

宮澤先生 (優しく)大場君、大場君、あなたは夏休みどうするの。

大場 うち貧乏だから、どこかへ行ったりする余裕がないんだ。それにうちのお母ちゃん、この夏に赤ちゃん産むんだ。だから家の手伝いしなくちゃ。

宮澤先生 それじゃ、大場君この夏休みにお兄さんになるのね。(大場照れる)

天野 頼りね一兄さんだな。

大場 なんだと。

宮澤先生 ほらまた。天野君、いいかげんにしなさい。

天野 (ふてくされて)は一い。

宮澤先生 さ、おしゃべりはこれくらいにして、お待ちかねの通信簿を返しましょう。

嬉しそうな顔あり、憂鬱そうな顔あり。

宮澤先生 高田君。

高田 はい。(通信簿を覗きこんで)やった一、体操甲だ。

高田が教室を走り回る。

宮澤先生 天野君。

天野 はい(自信ありそうに)。

高田 ずいぶん自信ありそうじゃない。

天野 (通信簿を開いて成績を見せる) まっ、こんなもんさ。

大岩が通信簿をとる。

大岩のまわりにみんなが集まる。

大岩 算術甲。綴り方甲。読み方甲。書き方甲。国史甲。理科甲。体操…
体操。あんた体操、丙じゃない。

天野 体操なんか馬鹿のやるもんだ。

高田 なんだと。

天野 （しまったという顔）

宮澤先生 天野君！あなたの考え方は間違っています。勉強がいくらできても、あなたのような考えの子は、先生嫌いです。体操だってとっても大切な科目なんです。

高田 そういうことさ。

宮澤先生 続けます。遠野さん。

遠野 はい。

宮澤先生 唱歌は甲ですよ。

遠野 先生、ありがとうございます。

宮澤先生 （先生はにこにこして通信簿を渡す）次、大岩さん。

大岩 はい。（自信ありそうな素振り、しかし通信簿を見てびっくり）
うおー、これは。…わー。

大岩は通信簿をくしゃくしゃにしよう。

宮澤先生 （慌てて大岩を止めて）そんなことしちゃ駄目でしょう。

大岩 …ごめんなさい。

宮澤先生 次、大場君。

大場 はい。

大場は隅でこっそり見ようとする。

天野が大場の通信簿を取り上げる。

天野 ははは。こいつみんな丙でやんの。馬鹿だねー。

宮澤先生 天野君！いいかげんにしなさい。人生、通信簿だけでは決まらないの。人それぞれに通信簿では表せない良さがあるの。

天野 でも、バケみたいに、頭が悪くて、うすのろの奴に何かいいところがあるんですか。

宮澤先生 大場君にもちゃんとあります。

天野 それは何ですか、先生。

宮澤先生 （考え込んで）…

大場 （期待をもって先生を眺めていたが…）もういいんです…僕（泣き出す）。

宮澤先生 （慌てて）そうそう、大場君の良さは優しさね。誰に対しても優しくできるところ。きっといいお兄さんになれるわよ。

大場が顔を上げる。

宮澤先生 もっと自信を持って、胸を張って。さあてと、それでは通信簿はしまつて。ちゃんとおうちの人に見せるのよ。

大岩 先生、こだまがまだ通信簿を返されてません。

宮澤先生 (あっ…) 青柳さん、ごめんなさい。えっと、あれ…、確かに昨日みんなの通信簿と一緒にここに入れておいたはずなのに。おかしいわね。

青柳 先生、いいんです。

宮澤先生 ごめんね。明日までに捜しとくから。明日また取りにきてくれる？

青柳 はい。

宮澤先生 それではこれで終わりにしましょう。みんなにとって楽しい夏休みになるといいわね。それと、天野君、大場君、もう喧嘩しちゃ駄目よ。

天野、大場 はい。

高田 起立。気をつけ。先生さようなら。

全員 さようなら。

先生、教室から出て行く。
子どもたち六人が中に残る。

高田 明日から夏休みか。小学校最後の。

遠野 みんなで一緒に夏休みを過ごせるのもこれっきりのね。

高田 何か思い出に残ることしないか。

大岩 どんなこと？

高田 肝試しなんかどうだい。

大場 いいね。

天野 なにいつてんだよ。一番弱虫のおめーが。

大岩 お化けが出てきても大丈夫？

大場 お化けは本当は、優しいんだよ。大丈夫にきまつてるだろ。

天野 へっ、強がりいうなよ。泣き虫毛虫が。

大場 なんだと。

大場は天野につかみかかっているが、倒され泣かされる。

大場 僕、弱虫じゃないやい。

高田 まあまあ。弱虫かどうかは、やってみればわかることだろ。じゃあ肝試しに決定でいいな。

遠野 私もやるの。

高田 怖いかい。

遠野 ええ。

大岩 大丈夫、あたしがついてるから。やろうじゃない。わくわくするわ。

天野 でも俺は勉強があるからな。

大岩 そんなことって、本当は怖いんでしょう。

天野 ば、馬鹿なこというなよ。お化けなんて非現実的な存在をどうしてこの俺が怖がらなくちゃいけないんだい。

大岩 じゃ、決定ね。

天野 で…でも、ターちゃん、オリンピックが気にならないかい。

高田 大丈夫。オリンピックは八月一日から八月十五日までだろ。八月十六日にやればいいじゃないか。どうだい天邪鬼。

天野 いいけど。

高田 どうだい、バケ。

大場 もちろん大丈夫さ。

高田 よーし、決定だな。ところでどこでやろうか。

大場 七つ森がいいよ。

大岩 どうして。

大場 七つ森の中心には大きな大きな杉の木があるっていう話だよ。そこまで行こうよ。木は百年たつと死んだ人の魂が乗り移って、木霊という妖怪になると言われているんだ。

遠野 大場君、お化けのことに詳しいのね。

天野 そんな、現実に存在しないものに詳しくったって何になるんだい。このテレビジョンの時代に。

高田 もうテレビジョンはわかったから、話を肝試しにもどすぞ。八月十六日に七つ森に集合。みんないいな。

大岩 何時に集合するの。

大場 夕方がいいよ。お化けは黄昏時に出るっていうから。

高田 それじゃ、四時でどうだい。（みんなうなずく）よーし決定。八月十六日の四時、七つ森の入口に集合。提燈忘れんなよ。

天野 提燈だって、この

大岩 テレビジョンの時代に…でしょう。

高田 肝試しには、懐中電灯よりも提燈の方が合うんだよ。じゃ八月十六日にまた会おう。

全員 さようなら。さようなら。

暗転

現代の夏休みのある日 七つ森の入り口

現代の大場憲一が登場する。

大場(現代) 私たちは、夏休みにときめく気持ちと、通信簿を胸に家に帰った。昭和十一年の夏休みは日本中がベルリンオリンピックの話題で持ち切りだった。女子平泳ぎでの前畑が優勝した。三段跳びは三連破達成。棒高跳びで早稲田の西田と慶応の大江が二位と三位に入り、お互いの健闘を喜びあった。八月十五日、十八の日の丸を掲げてベルリンオリンピックは終わった。次のオリンピックは東京に決定。この決定は、私たちに夢と希望を与えてくれた。そして約束の八月十六日がやってきた。

昭和十一年八月十六日 七つ森

◆其ノ一 森の入り口

舞台中央に大場、高田、天野が手に提灯を持って立っている。

高田 それにしても遅いな。

遠野と大岩がやってくる。

高田 おい、遅いじゃないか。

遠野 ごめんなさい。青柳さんちに寄ってたから。

天野 で、青柳どうしたんだ。

大岩 急に熱がでちゃって、寝てなくちゃいけないから、今日は来れないって。

天野 それは口実。きっと怖くなったのさ。

高田 ま、ともかく出発しようぜ。

みんな出発する。

◆其ノ二 森の中

高田 おー。森の中はずいぶん暗いんだな。まるで夜じゃないか。

遠野 これじゃ、お化けが出てもおかしくないわね。なんか怖い。

高田 これじゃ、危なくて一人一人別々には歩けないな。道に迷いそうだ。

天野 ターちゃん、やめて帰ろう。道に迷ったら大変だよ。
大岩 怖いよね、震えてるわよ。へん、男のくせにだらしない。

大岩が天野の背中をビシッと叩く。

天野 いて一な。わかったよ。行くよ。行けばいいんだろ。
遠野 ねっ、みんな一緒に歩きましょう。それでも十分怖いわ。
高田 そうするか。よーし。じゃ、大きな杉の木目指して出発だ。

みんなが歩き出す。
少し歩いたところで、突然遠野が悲鳴をあげる。

大岩 みーちゃん、どうしたの。
遠野 何か冷としたものが、首筋を触ったの。
大岩 冷としたもの？
大場 そいつは妖怪ぶるぶるの仕業だよ。ぶるぶるは臆病そうな人の体の
中に入って怯えさせる、悪戯好きの妖怪さ。
天野 また始まった。ただ冷たい風が吹いただけだろ。
遠野 じゃ、天野君、一番後ろに行ってよ。
天野 俺が。
遠野 そうよ…怖いのか？
天野 そ、そんなことはないけど…(みんなの目線を感じて)行くよ、行けば
いいんだろ。

天野一番後ろに行く。
みんな黙って歩く。

天野 わー。
高田 どうしたんだ。
天野 いや、何でもない。ちょっとぶるぶるってきたものだから。
大場 ぶるぶるだ。やっぱりぶるぶるがいるんだ。ぶるぶるにおどかさ
れ
たってことは、君が弱虫だってことさ。
天野 なんだとー。

天野は大場につかみかかる。

高田 おいおい、こんなところで、喧嘩なんかすんなよ。

突然雨が降ってくる

高田　　夕立だ。

雷鳴。

子どもたちの悲鳴。

高田　なるべく背を低くして歩こう。

天野　だから帰ろうって言ったんだ。

高田　今更そんなこと言ったって仕方ないだろう。あんまりぐずぐず言うなよ。

雷鳴

子どもたちの悲鳴。

遠野、大岩　　キャー。

高田　絶対、手を離すなよ。離すとはぐれちまうからな。しかしちつとも前が見えないな、早く隠れるところを捜さなくっちゃ。

雷の音のみ響く。

五人が繋がって森の中を歩いて行く。

雷が鳴るごとに高田以外の一人一人が妖怪に変わっていく。

妖怪は稲光に喜び飛び回る。

最後には高田以外の四人が妖怪に変わってしまう。

◆其ノ三　カシャボ

高田　（妖怪に気が付いて）うわっ、何だおまえたちは。

妖怪たちが飛び回る。

それはカシャボという子どもの姿をした妖怪である。

カシャボ 1　やっと思い付いたかい。

カシャボ 2　気が付いたかい。

カシャボ 3　おらたちカシャボ

カシャボ 4　そうカシャボ

高田　他の四人はどうなったんだ。

カシャボ 1　教えてほしけりゃ鬼ごっこしよう。

カシャボ 2 そう鬼ごっこ

カシャボ 3 おらたちを捕まえたら

カシャボ 4 教えてやるよ。

高田 この俺と鬼ごっこだと。よしやろう。この俺より速く走れると思っ
てんのか、甘い甘い。おまえらなんか直ぐ捕まえてやるさ。

カシャボ 1 できるかどうかやってごらん

カシャボ 2 そうやってごらん

カシャボ 3 君が鬼だよ

カシャボ 4 さあいくよ

カシャボ 1～4 いち にの さん！

四匹一斉に逃げ出す。

それを追いかける高田。

高田、一匹を追い詰める。

高田 さあ、追い詰めたぞ。それ！（何かにぶつかる）いてー。

カシャボ 1 残念でした

カシャボ 2 惜しかったね

カシャボ 3 ここまでおいで

カシャボ 4 鬼さんこちら

高田 くそー、馬鹿にしやがって。

また追いかける。

そしてまた何かにぶつかる。

高田 いてー。

カシャボ 1～4 ははははは

カシャボ 1 残念でした

カシャボ 2 もう少し

カシャボ 3 そうかんたんには

カシャボ 4 掴まらない

カシャボ 1 おらたちやカシャボ

カシャボ 2 そうカシャボ

カシャボ 3 そろそろおいとま

カシャボ 4 いたしましょう

カシャボ 1～4 さいならー

高田 おい四人がどうなったのか教えてくれよ。

四匹を追いかける。
そしてまた何かにぶつかる。

高田 何なんだ、これは…

空間に目に見えない大きな壁があるようである。
高田が頭を押さえる。

高田 そうか、こいつは婆ちゃんが言ってた、ぬりかべっていう奴か…

高田が頭を押さえて倒れる。
暗転

◆其ノ四 傘化け

ふくろうの鳴き声が響いている。
遠野と大岩が客席をはさんだ通路に現れる。
場所は森の中を流れている沢の両側という設定。
明かりは二人が持っている提灯の明かりのみ。
二人は舞台に向かってゆっくり歩いていく。

遠野 ここどこかしら。岩がごろごろしている。オーイ、誰かいる。

大岩 そっちにいるのみーちゃん？

遠野 そうよ、そっちは？

大岩 オオイワ

遠野 よかった、ね、早くこっちに来て。怖いわ。

大岩 ちょっといけないな。この先は岩がごろごろしているもん。

遠野 大岩さんでも駄目。

大岩 あのね、あたしは化けもんじゃないんだから。

遠野 そうなの？

大岩 みーちゃん、怒るよ。

遠野 ごめんなさい、冗談でもないってないと怖くて怖くて。ね、どこか歩いていける所を搜しましょう。

大岩 ここいらはやめたほうがいいな、岩が動いてるような気がする。妖怪なんじゃないかな。

遠野 怖いこと言わないでよ。それじゃ、向こうの方に歩いてみましょうよ。

二人は沢に沿って歩いていく。

大岩 ここんところ、歩いていけそうだな、そっちはどう？
遠野 なんとかやってみるわ。

舞台が明るくなり、そこにと遠野が現れる。
遠野は中央に座っている人影に気づく。

遠野 大岩さん、大岩さん。よかった、やっと会えたわね。

中央に座っている人物が振り返る。
大岩ではない。

遠野 あなたは？

中央に座っているのは傘のお化けである。
その傘のお化けが立ち上がる。
更に四人の傘のお化けが現れる。
遠野は悲鳴をあげて気絶する(袖の中へ倒れ込む)。
遠野が気絶したのと反対方向から、大岩が現れる。

大岩 みーちゃん、みーちゃん。

傘のお化けたちに気がついてしりもちをつく大岩。

傘化け1 そんなに怖がらなくても大丈夫。私たちは怪しいもんじゃないから。

大岩 怪しいもんじゃなくて、何なのよ。

傘化け1 私たちは単なる妖怪よ。

傘化け2～5 (次々と)妖怪よ。

大岩 よ…ようかい(気絶しかかる)

傘化け2 (大岩を起こして)妖怪だったって、人には何もしないのよ。

傘化け3 妖怪舞踏大会でも優勝したんですよ。

傘化け4 見たいですか？

傘化け5 見たいでしょう？

傘化け1 見たいといいなさい。

大岩 見…見たい。

傘化け 1　そうですか、見たいですか。それでは御覧に入れましょう。

傘化けの華麗なる傘の舞。

傘化け 1　どう？気に入ってくれた？

大岩　あたしを弟子にしてください。あたし、女優志望なんです。

傘化け 1　それは、ちょっと困るわ。

大岩　そこをなんとか。大岩洋子何でもします。先生、お願いします。

傘化け 1　私、先生じゃないわ。

大岩　いえ、先生と呼ばせてください。先生。先生。

傘化け 1　困るわ。やめて、やめてよ。

客席に逃げる。

大岩　先生。先生。逃げても無駄ですよ。この大岩、くらいついたら離しません。（客席の一人に）先生。先生。こんなところで男に化けていてもだめです。さっ、私に踊りを教えてください。

傘化け 1　（舞台から）私はここよ。

大岩　じゃ、今のは？

傘化け 1　今のは妖怪ダイダラボッチよ。

大岩　ダイダラボッチ。…では改めてお願いします。あたしを弟子にしてください。

傘化け 1　悪いけど。

傘化け 2～5　（次々と）悪いけど。

傘化け 1　あなたには眠ってもらうわ。

傘化け 2～5　（次々と）眠ってもらうわ。

大岩　なぜ？

傘化け 1　私たちのことを覚えていてもらっては困るのよ。私たちは、いるかいらないかわからない曖昧な存在じゃなくってはいけないものなの。ごめんなさいね。

傘化け 2～5　ごめんなさいね。

傘化けたちが和傘を広げて大岩を囲む。

傘化けたちがその囲んでいた傘を上げると、その中で大岩が眠っている。

傘化け 1　おやすみなさい。

傘化け 2～5　（次々と）おやすみなさい。

傘化けたち去る。
暗転。

◆其ノ五 山父

天野 わー（客席中央で）。なんだ、蜘蛛の巣か。あーびっくりした。それにしても薄気味悪いところだな。何でこんなところを一人で歩かなくちゃいけないんだ。みんなどうしてるだろ。俺だけはぐれちゃったんじゃないかな。みんな、俺をおいて家に帰っちゃったんじゃないかな。だからあの時やめようって言ったんだ。（何かにつまずく）あっ！

山父 痛いじゃないか。せっかくいい気持ちで寝ていたのに。

天野 あっあっ。お…お…

山父 「おまえはいったい誰だ」って思ってるな。俺はこの森に住む妖怪さ。

天野 ようかい。う…う…

山父 「嘘だ、この世の中に妖怪なんているわけない」って思ってるな。ふふ、でも現にここにいるじゃないか。

天野 こ、こいつ、

山父 「こいつ人の心を全部読んでしまうのか」って思ってるな。そうさ俺はおまえの考えていることが全部わかる。俺をやっつけようなんて思うなよ。俺はおまえが次に何をしようとしているのか全部お見通しなんだから。

天野 （泣く）

山父 「俺は死ぬんだろうか、こいつに殺されるんだろうか。それなら泣いて同情を買おう、そして許してもらおう」って思ってるな。男のくせにみっともない。少年よ。男はそんなせこいことを考えちゃいかん。話は変わるが人の心を読む俺のことは人間界でも有名だろう。

天野 ？

山父 何…「聞いたこともない」だと、この山父を知らんのか。

天野 やまちち？

山父 そうだ。山父だ。英語でいえばマウンテン・ファーザーだ。おまえには難しいかな。何、「俺にわからないことなんかない、俺は天才だ」だと。よおし、本当にそうか調べてやる。（天野の頭に自分の頭をつける）うっ、なんだおまえの頭の中は…こんなのは初めてだ。テレビジョン、テレビジョン、テレビジョンとそればかりじゃないか。妖怪とかお化けとかも入れないといかん。（天野の耳元で囁く）妖

怪、妖怪、妖怪、妖怪、妖怪。

天野 あー。（突然立ち上がる）ははははは、妖怪、妖怪、妖怪。ははははは。

天野は妖怪、妖怪と騒ぎまくる。

山父 まずい、気がおかしくなっちゃった。

天野、山父に襲いかかる。

山父 こらやめろ、やめろ。こりゃいかん正気じゃないやつは次に何をするかが読めん。

天野 山父、山父。成敗してくれる。

突然、天野何かにつまずいてばったり倒れる。

山父 助かった（安堵の表情で天を仰ぐ）。

暗転

◆其ノ六 木霊

大場が舞台上に現れる。

大場 （客席を眺めて）大きな杉の木。ここが七つ森の中心だ。

突然、誰かが後ろから目隠しをする。

大場 わー。

だれか だーれだ？

大場 び、びっくりするじゃないか。誰だい。みーちゃんかい。それともおいわかい。

だれか はずれ、私よ。

青柳が立っている。

大場 青柳さんじゃないか。でもどうしてここに。熱があつて家で寝てたんだろ。

青柳 熱なんてない。

大場 それじゃ…

青柳 あれは嘘。この森であなたと二人で会うために嘘をついたの。

大場 …

青柳 大場君、あなた前にお化けに会いたいわって星に願いをかけたことがあったわね。今でも会いたい？

大場 （うなずく）

青柳 それじゃあ、会わせてあげる。

大場 君にそんなこと出来るの。

青柳 ええ。目をつむって三つ数えて。目を開けたときに、あなたの目の前にお化けが立ってるわ。さ、目をつむって。三つ数えて。

大場 一・二・三（目を開ける。目の前には青柳が立っている）いないじゃないか。

青柳 いるわ。目の前に…

大場 目の前…目の前にいるのはき…み、…それじゃ、

青柳 そう、私のこと。

大場 君がお化けだっていうの。

青柳 （うなずく）

大場 信じられないな。だって君とはこんなちっちゃなときからの友だちだったろ。

青柳 そういう記憶をみんなに与えたの。あの日に。

大場 あの日って。

青柳 かくれんぼして遊んだ日。

大場 そうか、あの時一人増えたのは君だったのか。それじゃ君は座敷童子

青柳 （首を振る）私は木霊。

大場 （大きな杉の木を見て）木霊か。うれしいなお化けに会えて。

青柳 大場君が「お化けに会いたい」って星に願いをかけたから会うことが出来たの。でもずいぶんミスをしちゃった。通信簿とか。

大場 それであの時君の通信簿がなかったのか。

青柳 先生が机の位置を覚えていたのにも驚いちゃった。危うくばれるところだった。

大場 けど、気がつかなかったな。だって青柳さんほんと人間そっくりなんだもん。

青柳 私、以前は人間だったの。

大場 本当かい。

青柳 この森に住むお化けはみんな元は人間だったの。

大場 それじゃいつお化けになったんだい。

青柳 説明してもわかってもらえないわ。
大場 そんなことわからないだろう。教えてよ。
青柳 …九年後。
大場 九年後？九年前じゃないのかい。
青柳 それが、九年先の未来のことなの。九年後の世界である事が起こり、
気がついたときには、九年前の世界でお化けになっていた。
大場 うーん、信じられないな、九年後の世界から来たなんて。何か証拠
でもあるのかい。
青柳 (首を振る)ただ…これから起こることがわかるというだけ。
大場 じゃ、今年何が起こるか教えてよ。
青柳 昭和十一年のことはよくわからない。私が生まれた年だから。私は
昭和十一年の八月三十一日が誕生日なの。だからまだこの世には存在
していないの。
私が覚えているのは四才になってからのことだから、昭和十五年よ
り後のことね。
大場 昭和十五年というと…あつ、東京オリンピックの年だね。水泳日本
は健在かい。三段跳びの四連破は達成できたかい。
青柳 東京オリンピックは中止になったわ。
大場 嘘だ、でたらめだ。わからないからそんなこと言って、ごまかして
るんだろう。
青柳 本当よ。こんな時にオリンピックなんてやっている余裕はないとい
うことで中止になったの。
大場 こんな時ってどんな時。
青柳 戦争。
大場 せ…せんそう、戦争が始まるっていうのかい。
青柳 (うなずく)
大場 いつ。
青柳 確か…来年
大場 来年！どこと。
青柳 初めは隣の支那と。そして私が五才のとき米国との戦争が始まった。
その戦争はすぐには終わらなかった。一年経っても二年経っても三年
経っても…そして昭和二十年八月、その戦争で私は死んだの…
大場 そうなんだ…
青柳 …
大場 僕もその戦争を経験するの？
青柳 (うなずく)赤紙がきて戦争に行くの、昭和二十年二十歳の夏に…
大場 僕が、戦争に行く。…それで、僕どうなるんだい。その戦争で死ぬ
のかい。

青柳 わからない…
大場 でも、どうして僕のことそんなによく知っているの？
青柳 それは…この町で友だちになったから。
大場 いつ？
青柳 それは…
大場 ま、いいや。で、(あっ)ターちゃん、ターちゃんはどうなるんだい。
青柳 高田君は神風特攻隊に加わったって報告があった。
大場 神風特攻隊？
青柳 敵の船に飛行機で体当たりするための戦闘部隊。
大場 その飛行機にターちゃん乗ってたのかい。
青柳 たぶん…、高田君の妹の花さん、そう言ってた。
大場 (天を仰ぎ)ターちゃんが…
青柳 …
大場 みーちゃんは？お岩は？
青柳 二人は歌手と女優として兵隊さんの慰問に出かけたの。そこで爆撃
にあって…
大場 …
青柳 それからどうなったかは、わからない…
大場 そんな…
青柳 …
大場 天邪鬼は？
青柳 成績が優秀だった天野君は大学に行って勉強、勉強また勉強。
大場 天邪鬼らしいね。
青柳 そんな天野君に、国から戦争の兵器開発に協力してくれって誘いが
あって…
大場 受けたのかい。
青柳 (首を振る)「僕はテレビジョンを研究するために大学に入ったんだ、
戦争に協力するためじゃない」って断って…
大場 それで？
青柳 警察に連れていかれて…拷問にあって、そして…(青柳の目から涙
がこぼれる。その涙が天野の悲しい運命を物語る)
大場 天邪鬼、かわいそうに。…何て世の中がやってくるんだ。お願いだ、
もっと話してくれ、君の体験したことを僕が知ることによって何かが変わる
かも知れないだろ。
青柳 未来は変えられない。
大場 やってみなくちやわかんないよ。ね、話して、君の体験したことを。
青柳 …
大場 お願い、話してよ。

青柳 （しばらく大場の目を見つめた後うなずく。そして自らの戦争体験を語り始める）